

古代塗料・こしあぶら(金漆)の語源⁽¹⁾

寺田 晁

1. はじめに

奈良時代から平安朝の時代にかけて金漆という塗料があった。中国、朝鮮半島の古い文献に金漆及び黄漆の記載があるが、日本には黄漆の名前はなく、黄色に着色した普通の漆を黄漆という。この金漆を使う技術は日本では平安朝後期頃に鎧の作り方が変化したのと共に廃れたらしく、それ以後には使用の記録はない。すなわちそれまでの短甲や挂甲に金漆を塗る形式から、大鎧に通常の漆で以て塗り固める形式—この方が甲冑がより丈夫な物になり装飾も美しくできる—に変わって行ったからである。このように金漆の伝承技術が途絶えて、江戸時代には既に謎の塗料となってしまっていて、材料に何が使用されたのであるか、どのような塗り方をしてどのような仕上がりであったかも分からなくなってしまった。多分、植物が生産する樹脂液であるが、その原料である植物の名前も分からない。技術は本来秘密にするもので、著作として残すことは難しい。それでも『延喜式』等には金漆に就いてかなりの数の使用例が記載されている事が分かっている。⁽⁴⁾ これ等から推定すると、金漆は古代に甲冑を黄金色に塗り上げる為に使用した塗料であって、また矢鏃の錆止め等にも用いられたので、金属に塗るから金漆と命名されたと思われるのである。⁽⁵⁾

『倭名類聚鈔(以下 和名抄という)』に「金漆 開元式云 台州有金漆樹 金漆和名古之阿布良」とあり、その樹とは「金漆樹 楊氏漢語抄云 金漆樹 許師阿夫良能紀」であると書かれているのがその実体を示す我国では唯一の記録である。⁽⁶⁾ これらが文献上で金漆と書いて“こしあぶら”と読む

理由である。

それでは金漆がなぜ“こしあぶら”であるか。

2. 過去に為された“こしあぶら”の語源の研究に就いて

江戸時代の文献学者であった新井白石は“漉し油”説を称えた。⁽⁴⁾ 東雅に「漆 ウルシ 倭名鈔に野王案を引て。漆はウルシ。木汁可以塗物也。金漆樹は楊氏漢語抄にコシアブラノキというと注せり。其義並びに不詳。東壁本草に抛るに。金州者为佳。世称金漆と見えたり。古語に潤沢をいひて。ウルフとも。ウルともいひけり。潤の字をよむことしかるが如き此也。ウルシとは。其の木汁の物を塗りて。光沢なるをいひしと見えたり。コシアブラとは。其淳ナル者にして。荏油の類を漉去るの謂と見えたり。」とあるによる。

有名な植物学者牧野富太郎博士⁽⁵⁾も工芸史家渡辺素舟博士⁽⁶⁾もこの説を採っている。

しかし、塗料は必ず漉してから塗るもので、現代の塗装技術がそうであるのみならず、漆を漉す事は延喜式にも規定されて昔も厳密に実行されていたのである。こしあぶらの語源にはなり難い。

坂部幸太郎氏は“漆は金州を佳しとする。世に金漆と称す”から「コシアブラは“越油”で、新潟を古代 コシノクニ と称んでいるから、漉しの意ではあるまい。—中略—磐船郡に漆山神社という古社があることを想起すれば、コシは古志で越後と考えてよい。—中略—磐船地方からは今でも透明度の優れた漆が産出する。これは地質によるものであろう。透明度のよい漆を鍛えのよい刀剣などに塗れば防錆にもなり、氷のような鉄肌上の漆は丁度金白壇のような色合になる。漆液は脂と考えてもおかしくないからコシアブラは古代にあっては“越の阿布良”を指していると考えられる。」⁽⁷⁾ とし、深津 正氏は文献のコシアブラの使用例を詳細に照会した結果、「このような性質のものが漆から製されるとは考えられない。」として「—前略—漆とは成分を異にした塗料であるように思われる。そうしてみると、やはり一般にいわれているように、コシアブラの木から採取されたものではなからうか。しかしどのようにしてそれが採取され、製造されたかについては、伊藤圭介が『日本産物志前編』美濃部(1876年)に、“其製造絶えて伝はらず”とあるように、現在では皆目不明というほかない。さてコシアブラの語源である

が、私は「越油」ではないかと思う。「越」はいうまでもなく越(高志)の国のことで、昔北陸地方をこのように称し、同時にまた、この方面に占住していた種族、いわゆる「越のえみし」の名称でもあった。金漆は、これらの種族が武器の金属製の部分に塗るために用いたものが、のちに律令国家により受けつがれたものではなからうか。⁽⁹⁾と結んでいる。

「越油の木とニレの木」という張間喜一氏の報文が『日本漆工』誌にあり⁽⁹⁾、このようにこしあぶらを越油と書く人は結構あったようだ。上原敬二博士の大著『樹木大図説 全3巻』にもコシアブラの歴史がかなり詳しく取り扱われている。⁽¹⁰⁾併し結局のところ“コシアブラ”は不詳であるとの結論である。

以上のような経緯からウコギ科の木本植物のコシアブラが精力的に調べられたのであるが、この木からはまた塗料になるような樹脂液は殆ど出ない事を多くの研究者が認める事になった。この理由からコシアブラの木は金漆塗料の原料とは成り得ないと考えられたのである。これらの事情が金漆が謎の塗料になった原因であった。

コシアブラは日本特有の木であり、⁽¹²⁾日本列島では北の方また寒い地方、深山に多い。その分布は全国的であるが九州には少ない。筆者に依ればコシアブラからは樹脂液が全く出ないのではなく、冬期に僅かに分泌する。この事は普通の日本漆液の分泌は夏が盛りであるから、コシアブラからも樹脂液は夏に出るであろうとする常識からは予想外であり、またコシアブラの植生は北国や深山に多いから、冬は積雪のため木に近ずき難く採液は不可能になる。^(2, 13)

延喜式に金漆の貢進地として美濃、讃岐、太宰府が指定されている。筆者は美濃からは同じウコギ科のタカノツメ、太宰府から同じ科のカクレミノ、讃岐からは此の両者に加えてコシアブラの三者の樹脂液が貢進されたと、それらの地方の植生分布の現状と樹脂液の分析の研究から結論した。^(2, 15)飯沼慾斎の『草木図説』に⁽¹⁴⁾依れば「美濃ではタカノツメをコシアブラと言う」とあるから、美濃ではこしあぶらはタカノツメの樹脂液であった。今日の自然の植生では美濃の国はカクレミノの植生の北限に近いのでカクレミノは昔にも有ったとしても少なかつたと思う。タカノツメはカクレミノと同様に金漆液を多く分泌するのである。すなわち美濃では金漆としてタカノツメの樹脂液が貢進されたと結論できる。九州ではコシアブラは少なく、カクレミノ

が多い。以上はこれら三者の木の民俗学的な考察、樹脂液の化学分析結果等から結論したのである。⁽¹⁵⁾

3. こしあぶらの“こし”は古代中国の“越国”で“越の国の油”である。

和名抄や新唐書に金漆の産地として記載されている台州は現代中国の浙江省台州地区であり、浙江省は昔から日本からの遣唐使や留学生の殆どが出入したわが国では越の国の名で良く識られた処であった。

角川漢和中辞典に拠れば“越”のわが国における読みは漢音ではエツ、呉音ではヲチであるから、⁽¹⁶⁾越の国は“エツの国”と読まれるべきであるが、筆者の以下における調査(4, 5, 6, 7)では和名抄の時代には“コシ(国訓)の国”と読むのが自然であったように思われる。

前記 2 に説明した如く多くの研究者は越=古志=こしのくに(越前・越中・越後)説を採っておられるが、源順の和名抄の時代には中国浙江省の越の国=こしのくにの油であるから“こしあぶら”と命名されたと筆者は考える。

4. 和名抄に現れる“越”の読み方について

「北陸国第55 越前：コシノミチノクチ、越中：コシノミチノナカ、越後：コシノミチノシリ」であって、エチゼン、エッチェウ、エチゴとは読んでいない。⁽¹⁷⁾

「越後国第101 羽茂郡 星越 ホシコシ」で訓読みである。⁽¹⁸⁾

「越王句踐の名前が巻4(7・8丁)鐘鼓類第46, 鉦鼓」の項に記載されているから“越”を“エツ”と読む事もあったと思はれる。⁽¹⁹⁾さらに「巻20木類第248に“越 纂要云 木枝相交下陰曰 越音越和名古無良”があり、⁽²⁰⁾“越”は“エツ”と読まれている場合もある。

以上の経緯から和名抄の時代にも越をこしと読んだのであると考えたので、梅光女学院大学名誉教授国語学者岡野信子先生にお尋ねしたところ、越はエツと読むよりこしと読む方が多いとのことのご意見であった。そこで以下の調査を

行なったのである。

5. 現代の大学生に“越”の読み方でコシとエツのどちらが多いか

A大学(理科系全56名のうち男子84%、女子16%)に於いて越の国コシノクニとエツノクニ、更に日を置いて、越コエとエツの二者何れかを選択させた場合

コシノクニ	53.8%	コエ	10.7%
エツノクニ	42.3%	エツ	89.3%

B大学(文科系女子Aクラス109名とBクラス80名)でやはり間に日を置いてコシとエツ、コシノクニとエツノクニの二者何れかを選択させた場合、

	クラスA	クラスB	クラスA	クラスB
コシ	32.1%	19.0%	コシノクニ	10.1%
エツ	65.1%	79.7%	エツノクニ	74.3%
				93.8%

以上のように同じ調査対象に対して日を置いて答えさせると、時間が経つて学習効果が現れ、エツと読む方に答が多くなる。回答書の答に場所的に纏まりがあるところから、個人の考えだけでは無く相談して答えたと思われるふしもあり、色々考え合わせると当初はエツよりもコシの答の方がもっと多かったと思われるのである。

6. 万葉集に現れる“越”の字の読まれ方について

万葉集歌句漢字総索引中に抽出してある“越”の読み方(例文総数123)の内、⁽²⁾越を2回含むものが2件あり、こし、こえ、をち、に当てはまらない読み方のもの1例があって、計数すると次の如くなる。万葉時代にも越をこしと読まれ易かったことが分かるのである。

こし、こえ	をち
106件 85.5%	18件 14.5%

7. 今日の“越の字を含む地名”から越の読み方、“エツ、ヲチ”と“こし”の出現頻度の調査

鏡味明克氏はその著書『地名学入門』⁽²²⁾に「地名が語るのは、まずその地名が経てきた歴史である。改変が行なわれずにきた地名は命名当初の時代を物語っている。」「地名は過去を語る。」と書いている。

『平凡社世界大百科辞典日本地図編』の見出し⁽²³⁾索引に登録されている市町村、街道、鉄道駅、公園、大学等の全部の5万5千余の地名固有名から越の字が含まれている名前のものを総て抽出した。越の読み方に就いて漢呉音[エツ、エチ、ヲチ]と国訓[こし]と読まれているものを以下の様に分類して摘出し、計数した。

7. 1 越の[エツ・エチ・オチ]など漢、呉音読み

内越(うてつ)、越後沢山、越後山脈、越後長沢、越後平野、越後湯沢、越前、越前岳、越前浜、越前堀、越前岬、越崎(えつさき)、越中沢岳、越中島、越中島駅、越中畑、越裏門(えりもん)、上信越高原、羽越本線、越後線、越美南線、越美北線、上越線、信越本線、磐越西線、磐越東線 26例

越知(おち・2件)、越智(2件)、越智岡、越知川、越知谷、越知面(おちょうもん)、越喜来(おっきらい・3件)、越波(おっぱ)、越原(おっぱら・2件)、越辺(おっぺ)川、北越智、高越(こうつ・2件)、風越(ふうえつ)山、南内越(みなみうてつ)、毛越(もうつ)寺 21例。

以上総計47例

7. 2 越の[こし・こえ]など国訓読み

青沢越、青山越、秋越、足越、天水越(あまみずこし)、硫黄乗越(いおうのっこし)峠、伊賀越峠、伊方越、石越(4件)、泉越トンネル、一ノ越

峠、稲越(4件)、獺越(うそごえ・2件)、歌越、打越(4件)、馬越、梅津呂越(うめづろごえ) 峠、浦越、江越町、王越(2件)、大越(9件)、大越田、大坂越、大通越(おおとうりごえ) 峠、大船越、大間越(おおまごし)、小田越(おだごえ)、追越(おっこし)、小原井越(おばらいごえ)、鬼越、小船越(おぶなこし)、折越(おりこし) 峠、御馬越(おんまごえ)、風越(かざこし) 峠、勝尾越(かつおごえ) 峠、神越川(かみこしがわ)、川越(5件)、木越、北越谷、草越、崩越(くずしごえ)、熊越峠、黒部乗越(くろべのっこし) 峠、小馬越(こうまごえ)、越(こえ)、越沢(こえさわ)、越地(こえじ・3件)、越路(こえじ・3件)、古越路(ここえじ)、越戸(こえど・2件)、越道(こえどう・2件)、越之浦(こえのうら)、小佐越(こさごえ・2件)、越(こし)、越賀(2件)、越谷(5件)、腰越(4件)、越小場(こしこば)、越路(3件)、越路野(こしじの)、越代(こしだい)、越高(こしたか)、越津、越戸(2件)、越廼(こしの)、越野尾、越ノ湯、越畑、越部、越巻、越水(2件)、越山(2件)、越川(こすかわ)、越河(こすごう、2件)、越百(こすも)川、小鳥越、小船越(2件)、駒越(こまごえ)、駒越(こまごし、2件)、越尾(こよお)、西越(さいごし)、坂越(さこし、3件)、笹ノ越峠、鹿越(しかごえ)、志賀越道(しがごえみち) 渋谷越(しぶたにごえ) 峠、島越(しまのこし)、下大越(しもおおごえ)、新泉越(しんいずみごえ) トンネル、新又越(しんまたごえ) 峠、杉ヶ越、須越(すごし)、瀬越(2件)、高越、滝越、只越、塚越(2件)、照越、戸越(とごえ、とごし、4件)、途中越(とちゅうごえ)、鳥尾越峠、鳥越(12件)、中越、名越、名越谷(なごしたに)、滑石越(なめいしごえ)、鍋越、西越(にしごし)、西鳥越、沼越峠(2件)、乗越(のりこえ) 峠、間越(はさこ)、八丁越峠、花立越(はなたてごえ) 峠、東沢乗越(ひがしざわのっこし) 峠、東鹿越(ひがししかごえ)、東山越(ひがしやまごえ) 峠、日越(ひごし)、氷ノ山越(ひょうのせんごえ) 峠、鶉越(5件)、吹越(ふきこし)ノ峠、吹越(ふっこし)、吹越烏帽子(ふっこしえぼし) 山、帆越(ほごえ) 岬、船越(ふなこし、22件)、星越(2件)、細越(4件)、堀越(9件)、幌内越(ほろないごし) 峠、馬越(まごし) 峠、大豆越(まめごし)、水越(みずこし・5件、みつこし・1件)、満越(みちごえ・2件)、満越(みつごし)、皆越、見ノ越峠、宮越(みやのこし)、室堂乗越(むろどうのっこし)、持越(もちこし・3件)、元越(もとごえ)、森越、矢越(やごし・

3件)、山越(やまごえ)山、山越(やまこし・2件)、湯野川越(ゆのかわごし)峠、夜越(よごえ)、横越(よごし)、蘭越(らんこし)、六十里越、川越線 263例。

以上の調査で エツ、ヲチと読む数は310例中47例(15.2%)。こし、こす、こえは263例(84.8%)になり、現代においてもこしと読まれやすい事が分かる。

8. 結論

8. 1 金漆は古代中国の台州(越の国)産の塗料で本来は越の油であるべきものが、越油と読まれた。この事実が、こしあぶら(金漆)の語源になったと結論する。

8. 2 今日の大学生を対象にした調査では、越の読みは漢音読みの知識が多くなっている結果、エツと読む者が多い事が分かった。これには多分に学習効果が含まれていると思われるから、昔日の日本人ではコシと読む事が多かったと思われる。

現に今、筆者が使用中の文豪MINI 5 UVワープロでは越の字はエツではなくてコシでなければ引き出せない。コシの読みの方が日本人の読み方に無理が無い様に思われるのである。

8. 3 同じ時代のその和名抄の中でも越は古志、コシの読み方が多い。万葉集にも同じである。

8. 4 現在に残る地名の読み方でもコシが断然多いので“越の国の油”は和名抄の昔に“こしあぶら”と読まれたと結論する事が出来ると思う。

謝辞：梅光女学院大学名誉教授岡野信子先生、短期大学部助教授島田裕子先生のご懇篤のご教示に感謝申し上げます。

引用文献

- (1) 古代塗料金漆の研究 XIV 報とする。
前報 XIII は『科学史研究』II 35, (1996), p.198
- (2) 寺田 晁 『化学』 45, (1990), p.853

- (3) 中田祝夫 『倭名類聚鈔・付関係資料集』 勉誠社文庫 2 3 (1987), p.173, 242
- (4) 新井白石 『東雅』 漆の条 307 (1719)
- (5) 牧野富太郎 『新日本植物図鑑』 北隆館 (1964), p.430
- (6) 渡辺素舟 『平安時代国民工芸の研究』 東京堂 (1948), p.303
- (7) 坂部幸太郎 『漆事伝』 松雲居私記, 私版, 終編-109 (1972); 『日本漆工』 No.92, 8; No.94, 4 (1958)
- (8) 深津 正 『植物和名語源新考』 八坂書房, (1976), p.97
- (9) 張間喜一 『日本漆工』 No.77, 12 (1956)
- (10) 上原敬二 『樹木大図説』 III, 有明書房, (1961), p.3-346, 3-360
- (11) 飯沼慾斎 (北村四郎編注) 『草木図説 木部 (上)』 保育社 (1977), p.45
- (12) 平凡社 『世界大百科事典』 8, “こしあぶら” 奥山春季解説 (1980), p.659
- (13) 寺田 晁 『日本漆工』 No.428, 8 (1988)
- (14) 松井悦造 『古文化財の科学』 22, 48 (1978)
- (15) 寺田 晁 『科学史研究』 II, 25, 125 (1986)
- (16) 貝塚茂樹、藤野岩友、小野 忍編 『漢和中辞典』 角川書店 (1987), p.1051
- (17) 文献 3 p.50
- (18) 文献 3 p.88
- (19) 文献 3 p.41
- (20) 文献 3 p.243
- (21) 日吉盛幸 『万葉集歌句漢字総索引 (下巻)』 桜楓社 (1992), p.2073
- (22) 鏡味明克 『地名学入門』 大修館書店 (1984), p.4
- (23) 平凡社 『世界大百科事典』 「日本地図編」 索引 (1968), p.121~328